

第1節— どうして句読を重視するのか

「句読」は、「句逗」「句投」「句断」「句絶」ともいい、文意が完全に終わるところを「句」、文意が完結していないが停頓を必要とするところを「読」という。古くは「、」を用い、『説文』、部に「、」、絶止する所有りて、、もて之を識すなり」とある。後には、圏点(○)を使うようになった。古書の多くには句読がついてないので、読者が自分で断句(句読点を打つこと)し、圏点をつけなければならない。過去の習慣では、読号は文字の間に打ち、句号は文字の傍らに打って、両者を区別していた¹⁾(書影10)。

古代の人は句読の訓練を重視した。『礼記』学記に「一年、経を離ち志を弁ずるを視る」(入学して一年後に、経文を意味によって分けさせ、内容の理解度を試験する)とある。この「経を離つ」とは經典を句読する能力である。清の黄以周は『儆季雜著』離経弁志説で次のようにいう。

古代の離経(句読)には2つの方法があった。1つは句断といい、もう1つは句絶という。……句断は言葉自体は中断するが意味のうえでは中断していない。句絶は言葉も意味もそこで断ち切れる。

句読できなかったり、誤って断句すれば、内容を正確に把握できず、いよいよ理解に苦しみ、さらには重大な結果をもたらす。こうしたことはしばしば見られる。たとえば、「夔一足」の伝説がある。「夔」は舜(古代の伝説上の帝王)の楽官とされる。舜はかつて「夔有一足」と言った。その意味は、「夔」のような優れた楽官ならば、彼ひとりがいれば十分だということである。この4字は2つの句から成り、「夔有一、足」(夔一有れば、足れり)と句読すべきである。後人はこれがわからなかったので、1つの句だと誤解してしまい、夔はついには一本足の怪物(夔に一足有り)となってしまったのである(原注:この話は『呂氏春秋』察伝に見える)。

わたしたちは医学に従事している。医学は直接に人々の健康と生命に関わっているので、医書の句読も軽視できない。

時日難鳴至今日淑乎日未也。淑謂其夙未能半。

【書影10】『増補史記評林』

1) 現在、中国で使われている標点符号は、標号と点号に大別される(補注①)。本章の原文引用に限り原書の標点符号をそのまま使った。

完全に反対になる。

以上の例から、句読が文章の解釈に密接にかかわり、誤った句読がきわめて深刻な影響を及ぼすことがわかるだろう。現存する古医籍の大部分は断句されていない。仮にあっても、何らかの欠点や誤りがあるかもしれない。ゆえに、句読の訓練は重視すべきであり、十分に時間と労力をかけて句読を体得しなければならない。このことは古医書の読むことにおいても、中国医学の継承と発揚にとっても、大変意義深いことである。

第2節——誤読例

古書を読むときの断句の誤り、標点の間違いを避けるにはどうすればよいか。それにはまず誤りの原因を研究する必要がある。以下、その原因を3つに分けて論ずる。

1. 文章の理解不足の例

文章をよく理解していないことが句読を誤る最大の原因である。文字の意味がわからず、文脈を把握できず、専門的な知識に欠け、出典や歴史的事実を知らないのでは、往々にして断句の誤りを引き起こしやすい。

[1] 文字の意味がわからず、文脈を把握できていない例

例1 人民衛生出版社版(1956)『中国医籍考』が引用する『甲乙経』(晋・皇甫謐)序の句読

〔誤〕其本論其文有理。雖不切於近事。不甚刪也。若必精要。後其間暇。当撰覈。以為教經云爾。

〔正〕其本論，其文有理。雖不切於近事，不甚刪也。若必精要，俟（原注：「後」は誤字）其間暇，当撰覈以為教經云爾。

（其の本に論ありて、其の文に理有り。近事に切ならずと雖も、甚だしくは刪せざるなり。若し必ず精要をなさんとすれば、其の間暇を俟ちて、当に撰覈し以て教經

例1 上海衛生出版社版(1957)『医方集解』(清・汪昂著)「大承気湯」の句読

〔誤〕陶節庵曰。去実熱。用大黃。無枳実。不通温経。用附子。無乾姜。不熱發表。用麻黄。無葱白。不発吐痰。用瓜蒂。無淡豉。不涌。

〔正〕陶節庵曰：去実熱用大黃，無枳実不通；温経用附子，無乾姜不熱；發表用麻黄，無葱白不発；吐痰用瓜蒂，無淡豉不涌。

（陶節庵曰く、実熱を去るに大黃を用いるも、枳実無くば通ぜず。経を温むるに附子を用いるも、乾姜無くば熱せず。表を発するに麻黄を用いるも、葱白無くば発せず。痰を吐かすに瓜蒂を用いるも、淡豉無くば涌かず、と）

原文は、枳実・乾姜・葱白・淡豉の重要性を強調し、それがなければだめだと言っている。標点者にはそれが理解できず、枳実・乾姜・葱白・淡豉を不必要なものとして誤解してしまっている。もし、これに従って投薬すればきっと治療過誤を招くだろう。

例2 商務印書館版(1974)『本草綱目』(明・李時珍著)巻26「馬薊」の句読

〔誤〕孫炎积云。似芹而葉細銳。可食菜也。一名菱。一名馬薊子。入薬用。

〔正〕孫炎积云：似芹而葉細銳，可食菜也。一名菱，一名馬薊。子入薬用。

（孫炎 积して云う、「芹に似て葉は細く鋭り、食うべき菜なり。一名は菱、一名は馬薊。子は薬に入れて用ゆ」と）

「馬薊」は一名を牛薊、胡芹、野苗香ともいい、芹と同類異種である。「馬薊子」は句読の誤りであり、「子（種子）」は下の句に所属すべきである。正しい意味は、馬薊の若葉は食用になるし、その種子は薬用になるということである。区切り方を誤ると、薬用になるものが種子から茎葉全体に変わってしまう。

例3 人民衛生出版社版(1963)『難経集注』十三難の句読

〔誤〕十三難曰。経言見其色而不得其脈。反得相勝之脈者。即死。得相生之脈者病。即自己色之与脈。当参相応。

〔正〕十三難曰：《経》言：見其色而不得其脈，反得相勝之脈者，即死；得相生之脈者，病即自己。色之与脈，当参相応。

（十三難に曰く：『経』に言う、其の色を見るも其の脈を得ず、反って相勝の脈を得る者は、即ち死す。相生の脈を得る者は、病即ち自ら已ゆ、と。色の脈とは、当に参じて相い応ずべし）

「得相生之脈者、病即自己」を誤って「得相生之脈者、病」と断句したのでは、意味が